

# 貞治の石仏 (延命地藏菩薩)

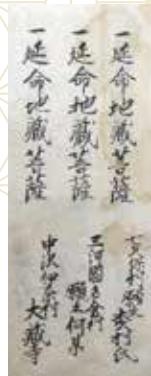
はじめに

石仏に初めて出合ったのは、町教育委員会の文化財巡りに参加した時だった。背の割りに貫いた日輪とその端整で柔和な面に魅せられ、由縁を知りたいと思い高遠町歴史博物館や光前寺を訪ねたこともあった。

## 若林酒屋の石仏

高遠町誌によると、美術の対象として石工の研究が進められ、「貞治の石仏」の著者曾根原駿吉郎もその一人で、昭和四十四年発刊されると一斉に目が向けられるようになった。本文の六十頁に、

一、延命地藏菩薩 三河國名倉村 願主何某



(伊那市立高遠町歴史博物館蔵)

とある。以来岡崎の石研の人ら幾人かが名倉へ訪ねて来た。翌年東京から研究家小松光衛氏の来訪をうけ、貞治石仏の中でも秀作であると告げられ、町文化財の指定となった。場所はJ A愛知東名倉支店裏。(昭和四十八年三月、広報したらの表紙に載る)



曾根原駿吉郎 著

## 名倉にあった貞治の石仏

昭和十三年初めて出合った沢田久夫は、あまりにも神々しい石仏だったので、地主の沢田治三郎翁にその由来を尋ねたという。すると「酒屋の左内様が諏訪の石屋に刻ませたもので宿送りで届けさせたものだ」と語ってくれた。

六角形の台座の上に端麗な石仏が穏やかな尊容を載せている。台座石の正面に、

能化延命 放光任風  
彈指頂禮 四智円融

右側に、

文政三庚申年三月廿七日

左側に

大平村 沢田左内謹建立

とある。文政三年(一八二〇)貞治の「石佛菩薩細工」帳によると彫像されたのは五十六歳、まさに心技ともに円熟した時期にあたる。



貞治の石仏

この石仏は本体と台座は石質を異にし、台座は当地の花崗岩を用いている。基台・竿台・ふとん石の三部よりなり、本体はこの地には産出しない石質輝緑岩であることから、この像は貞治の生地高遠方面で作られたと思われる。

基台 高さ二十三センチ  
竿台 高さ三十六センチ  
ふとん台 厚さ九センチ  
本体 像高五十六センチ  
台座含めて総高一メートル二十四センチ

この地藏尊は信州から中馬便で届けられたと考えられ、治三郎翁のいう諏訪は高遠であった。

## 守屋貞治とは

明和二年(一七六五)高遠藩藤沢塩供村(現伊那市高遠町)に生まれ、石工の中でも特に優れた腕を持ち希代の名工と謳われた。六十八歳で歿するまでに三百三十六体の石仏を刻んでおり、「石佛菩薩細工」帳に書き記している。

この分布は長野県を中心に東京から山口まで一都九県に及んでいるが、愛知県ではただ一体の石仏である。

## 旅日記

貞治は文政十一年(一八二八)伊勢国河崎の宝珠院へ地藏尊建立のため、三月三日故郷を発ち九日に三河に入ったという日記がある。(以下抄録)

波合□□を打越 根羽より津具通り 雲雀峠に掛り八日晚ニ雲雀村ニ泊り九日ニ津具宿より田口へ下り侍り「根羽より雲雀が峯へのし上里麓のつぐみ田の口に下る」又田内より海老へ小峠有「田内与利海老が峠をは越えて今は黒瀬の壺里川上」(下略)



石佛菩薩細工 守屋貞治旅日記(表紙改)

## 願主沢田左内

若林酒屋沢田家は大平村大屋沢田次太夫家の分家で、酒造を始め大庄屋をしていた。左内はその三代目で通称久吉、諱を暉里といった。

そして四代目左四郎は川口原の堤を築いた人で、村の水禍は除かれたが身代には大ひびを入れた。のちに家屋敷を売り払い県外に退去した。

## おわりに

記録の失われた今、他の貞治による地藏尊は石工百四十一日半かかっている。高遠のミケランジェロともいわれる貞治、石仏は馬の背に揺られ

馬子唄でも聞きながら来たただろうか、などと想いを馳せる。  
(設楽町文化財保護審議会委員 澤田 豊美)